

報告

母親行動の発達プロセス — A島居住の幼児を持つ母親の語りを通して —

玉城清子¹ 西平朋子¹ 吉川千恵子² 嘉陽田友香¹ 上田礼子³

背景：現代は都市化・核家族化の進行と共に、少子化が進行し子育ての知識や技術の模倣学習が少ない者が多く、子育てが困難な状況にある。

目的：幼児の母親が子育て交流会に参加することによって生じる、母親行動の変化のプロセスを明らかにし、今後の子育て支援に資する。

方法：A島に居住し幼児を育てている母親550人を対象にPACAP (Pre-Assessment of Child Abuse Prevention 現代子育て環境アセスメント) 調査を実施して抽出した「相談希望群」「疑問群」「対象群」の中から「子育て交流会」へ参加した者の発達プロセスを考察したものである。研究協力者は10人の母親であり、「子育て交流会」は週ごとに3回ひらかれ、そこでの発言を修正版グランデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いて分析した。

結果：【子育て感】の段階では、子育てに《困難感》を持っていたが、《工夫し乗り切る》方法を見出そうと試行錯誤を重ねるが、全国的な早寝・早起き運動を自分の子どもに実施させるとなると《早寝させるのが困難》と感じていた。また、子育てに対する《支援の求め》では《気軽に預けられる場所》の必要性や母親自身の精神的健康のために《リフレッシュの必要性》を感じており、リフレッシュ時間を求めている。さらに母親は《具体的な育児法》や子育てがうまくできるような《子育て情報》の提供を求めている。家事育児に《夫を巻き込む》ことにより自己の心理的負担の軽減を図っていた。また、夫の子どもへの関わり方や子育て法は自身の《子育ての振り返り》の機会となっていた。最終的には《子どもに関心を持つ》ことによって子育てを自分たちのものとし、《母親同士の繋がり》を深め、【子育て環境作り】に取り組みたいと意識するようになっていた。

結論：はじめ母親達は自分の子育て感について考え、その後、自己の子育ての振り返りを行い他者の援助が必要なことについては支援を求めている。そして最終的には子育て環境を自分たちで作る必要性を感じるよう変化していた。

キーワード：幼児の母親、子育て交流会、母親行動、発達、プロセス

1. はじめに

妊娠・出産・育児は人間の種の保存には絶対に必要で、これまで家族や地域で受け継がれた知識を使って誰もが自然に行なってきた (佐藤, 2000)。しかしながら、現在日本では、少子化や子ども虐待が社会問題となり、母子保健上の大きな課題となっている。なぜそのようなようになったのだろうか。

戦後の高度経済成長戦略によって産業が農耕から工業中心へ急速に転換したことにより、若

者は職を求めて都市部へ移動し (荒川, 1991; 島田, 2005)、都市化が急激に進行した。同時に彼らが都会で家庭を持ち核家族化が進行した (森岡, 1992; 経済企画庁, 1994)。都市化・核家族化により近隣との繋がりが希薄になり、地域からの子育てサポートも減り、さらに地方に住む親族からの子育て支援も得にくく、子育ては夫婦のみで行わざるを得ない結果となった。

社会経済構造の変化はまた、家族の役割分業にも変化をもたらした。核家族では夫婦のみで家庭を維持しなければならないため、夫は就業し妻は子育てと家事担当という性役割分業が進んだ (野々山, 1994; 横山, 2002; 落合, 2004)。そのような状況下で母親は育児ストレスを抱え

¹ 沖縄県立看護大学

² 元沖縄県立看護大学

³ 沖縄県立看護大学名誉教授

ながら生活していると報告されている（野口，小川，松村，2005；高橋，2007）。地域社会の希薄化や核家族化の中で、母親はどのように育児を行なっているのでしょうか。各自治体の子育て支援に関する研究や報告は多いが、母親が子育てについてどのように考え行動しているかに関する研究は少ない。そこで本研究は、子育てに関する交流会に参加した母親の母親行動の変化のプロセスを明らかにし、今後の子育ての支援に資することを目的とした。

2. 研究方法

1) 研究協力者

研究協力者は、A島に居住する幼児の母親550名にPACAP調査（Pre-Assessment of Child Abuse Prevention 現代子育て環境アセスメント）（上田，2011）を実施して抽出した「相談希望群」「疑問群」「対象群」の中から、A島子育て支援研究会が主催する「子育て交流会」への参加呼びかけに応じた10人であった。年齢は30代8人、40代2人で、子どもの数はひとりが2人、二人以上が8人で、出身別ではA島4人、本島3人、県外3人であった。また職業は就業有7人、家業手伝い2人、専業主婦1人であった。

2) データ収集方法

平成24年12月に週1回の割合で連続3回の子育て交流会を開催した。各回ともにファシリテータは親行動の醸成を目的に子育てについて自由に発言ができるよう支援を行った。交流会は各回とも1時間程度で終了し、その内容は研究協力者の許可を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。

3) 研究デザイン

本研究の分析には修正版グランデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach 以下M-GTAと略す）を用いた。M-

GTAは、StrausとGlaserによってシンボリック相互作用論を基盤として考案されたグランデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を木下によって修正されたものである。M-GTAはヒューマンサービス領域における実践への還元を目的としており、本研究も母親の育児を通しての生涯発達を目指すものであるため研究方法として適切と考えた。

M-GTAでは「分析焦点者」と「分析テーマ」を設定し、その観点からデータに表現されている意味を深く理解し、概念を生成する（木下，2003）。分析の過程では概念・定義・具体例・理論的メモで構成される「分析ワークシート」を用いる。

4) 分析方法

分析焦点者を「幼児の母親」、分析テーマを「幼児の母親の子育てに対する思い」とし、「子育て交流会」の逐語録を注意深く読みながら概念を生成した。概念からカテゴリーを生成する際に、1つのカテゴリーに内包される概念群に多様性がある場合は、サブカテゴリーをおいた。そしてデータから概念、概念からサブカテゴリー・カテゴリーを生成しカテゴリー間の相互関係を結果図としてまとめると共にストーリーラインとして文章化した。信憑性・妥当性を確保するためにM-GTAの研修会に参加したことがあり、また、それを用いて論文を書いた経験のある共同研究者と検討を行なった。

5) 倫理的配慮

研究への協力は自由意志に基づくものとし、承諾後でも取りやめることができること、研究結果は学会での発表や論文にすることを説明し、口頭での承諾を得た。研究計画書は研究者が所属する大学の研究倫理審査委員会の承諾を得た（承認番号10013）。

3. 結果

はじめに結果図と全体のストーリーラインを示した上で、個々のカテゴリーの説明を行なうことにする。なお、【 】はカテゴリー、《 》はサブカテゴリー、〈 〉は概念を示している。交流会の発言は「 」で示し、また発言の中に示した（ ）は文意が理解しやすいように研究者が補足したものである。

1) ストーリーライン

幼児を養育中で子育て交流会に参加した母親の記録から16の概念が抽出され、子育てによる母親行動の発達プロセスとして3つのカテゴリーが生成された(図1)。初めは自身の【子育て感】の認識の段階で、子育てに《困難感》を持ったり、何とか《工夫し乗り切る》方法を試したり、全国的に展開されている早寝・早起き運動を、自分の子どもに実践するとすると《早寝させるのが困難》と感じていた。また、母親同士では同じA島に住みながら〈少ない母親同士の交流〉と感じていた。

次は【支援の求めと自己の子育ての振り返り】の段階である。《支援の求め》では〈気軽に預けられる場所〉の必要性、育児でイライラしないためには自分の時間を持ち〈リフレッシュの必要性〉を感じており、それを理解して欲しいと願っていた。母親は〈具体的な育児法〉や、子育てがうまくできるような〈子育て情報〉の提供を求めている。一方、家庭においては家事・育児に〈夫を巻き込む〉ことにより自己の心理的負担の軽減を図っていた。さらに〈夫の子育て法〉や夫の子どもへの関わり方を通して子育てを〈夫に学ぶ〉ことは自分自身の《子育ての振り返り》へつながっていた。

最後には〈子どもへの関心〉を持つことによって子育てを自分たちのものとして捉え、さらに〈母親同士の繋がり〉を深めることによって情報を共有し、子どもによりよい環境を与え

るための【子育て環境作り】に取り組みたいと意識するようになっていた。

2) カテゴリーごとの説明

(1) 【子育て感】

【子育て感】は、《困難感》《工夫し乗り切る》《早寝させるのが困難》のサブカテゴリーで構成されていた。《困難感》は〈ヘルプ〉と〈子どもにあたる〉の概念で構成されていた。そのうち〈ヘルプ〉では、子どもの健康状態が入院するほど重症ではないが、自分だけでは対処法が分からず不安である、また、近くに子どもの健康状態が分かるサポート者がいないので医療施設に助けを求めている。

1日に何回も病院に行って、病院の先生から「これぐらいの子どもだったら熱出るよ、連れてくる方が大変だよ」って言われて。…元気がなかったら心配になって何回も病院連れて行って。「ちょっとこんなだったら入院じゃなくて、泊まっていく？ 家に帰っても心配なんですよ」って(言われて)、1回入院したことがあって…。

母親は順調に子育てをしているわけではなく、心の余裕がない場合には子どもの行動を待てずにイライラし、自己コントロールができず〈子どもにあたる〉行動を取っていた。

もう少し信頼して待てたらいいんですけど、「あれしろ、これしろ」これが多すぎて、(待つことが)出来なくなってしまって、(子どもは)言われるまで待ってる。それでイライラになってしまう…。待てない。

《工夫して乗り切る》は〈早寝・早起きさせるための工夫〉や〈義父母との考え方の違い〉で構成されていた。早起きをさせるために、朝の楽しみをつくり、子どもが朝自然に目覚めるよ

うな積極的工夫を行なっていた。〈義父母との考え方の違い〉では、嫁の立場として義父母にはっきり「ノー」と言うことができずに自分が諦める、つまり消極的な乗り切り方で対処していた。

保育園から帰ってきたら5時とか6時くらい（なので）、子どもはお腹をすかしている時間帯…。おじいちゃんおばあちゃんが夕飯前にバナナ1本（与え）、小ちゃい子（には）お腹いっぱい夕飯食べれないことが何回もあって。「バナナ食べたらご飯食べれなくなるから今あげないで」って言うが、（義父母は）「この時間帯お腹すくんだよ」って言うので、…。もう諦めました、毎日じゃないので。（だから）預けているときは、もう覚悟して預ける。

消極的な乗り切り方には、普段は義父母との関係性を悪化させたくないため黙っているが、場合によっては義父母を納得させるために専門家の言葉を利用した対処を行っていた。

自分の親だったら止めてって言えるけど、やっぱり言えないので。…それで一回、（子どもが）ぶつぶつ作って、病院に行って薬とかもらって…。自分が言ったら棘があるので、病院の先生に、「何でもかんでもあげてはよくないっていわれた。これは、食べ物からきているぶつぶつなのだよ言われた」と伝えて、やっと止まったんですけど。

《早寝させるのが困難》は〈子どもの特徴〉と〈親の生活リズムの影響〉から構成されていた。そのうち〈子どもの特徴〉は母親が子どもを寝かしつける努力をしているにも関わらず、子どもがそれに反応しないため早寝をさせることが困難な子どもであった。

部屋の電気も全部消してるんだけど、この2歳の子は、一人でこの暗闇の中で起きて、9時半、10時

まで（起きて）…。親にかまって欲しいとかではなくて、本当に眠れなくて、唄を歌ったり、ゴロゴロしたりして…。

〈親の生活リズムの影響〉は両親の帰宅時間の影響を受けていた。父親の場合は帰宅時間が子どもの入眠時間と重なると「子どもが目覚めてしまう」ことであり、母親の場合は帰宅後に子どもの夕食やお風呂の世話に時間を取られるため、子どもの入眠時間が遅くなることであった。

仕事に4月から復帰したんですけど、復帰する前までは、ほんとに5時半から夕飯あげて、それからお風呂に入れて、8時半、9時半には寝かせていたんですよ。（仕事に復帰したら）夜9時までに寝かせるのがちょっと厳しくなって、10時前まで起きてたりというのがあって。それでもやっぱり10時くらいまでには寝かすようにしているんですけど、やっぱり寝かせるのは大変だな…。

〈少ない母親同士の交流〉は「同じクラスの子でも親が分からない」や「（支援センターでは）毎日来るお母さんとあまり来ないお母さんのグループがあり、そこになかなか入れない」などがあり、同じA島で子育てをしている母親であることは認識しているが、お互いの交流はない状態である。

（2）【支援の求めと自己の子育ての振り返り】

【支援の求めと自己の子育ての振り返り】は《支援の求め》と《子育ての振り返り》のサブカテゴリーから構成されていた。そのうち前者は〈気軽に預けられる場所〉や〈リフレッシュの必要性〉〈具体的な育児法〉〈子育て情報〉の概念で構成されていた。〈気軽に預けられる場所〉は、島内に血縁関係者がいないことから用事がある時には子どもを預けることが困難なた

め預けられる場所が欲しいと感じていた。

実家がなかったりすると預ける所もないし、実家があったら預けるっていうことでそれでいいのかなって、お友達のお母さんとも話をしていますね。病気したときに思ったんですけど…、(夫婦)2人ともここ地元じゃないし親もいないので、何かあったときは2人で対応して、仕事を休めないとき、預けられないときに(どうするのか)と。みなさんはどうしていますか？

一方、地元出身の母親は、「放課後はどこの家についてもみてくれているので」と語っており、地元からの支援を得ていた。

〈リフレッシュの必要性〉は、イライラしながら子育てするよりも自分の時間を持ちリフレッシュして子どもに対応した方が子どもにとってもよいと分かっているが、周囲からはリフレッシュ時間を子どもの世話もせず遊んでいると思われることが辛いと感じていた。

子どもが寝てから自分のお金を使って外に行くというのは申し訳ないというのがある。そういうことでの息抜きは出来ないし、ストレス発散がなかなかできない。

〈具体的な育児法〉では、「早寝・早起き」などの子育てに関するスローガンは知っているが、現実の育児に直面し、具体的な実践法が分からないと困惑していた。

早寝・早起きとかあるんですけど。具体的に早寝って何時に寝かせればよいか、何を食べさせたいのか、曖昧だから親も具体的なことがわからないうままに自己流になってしまう。

さらに、親や祖父母が子どもにとって望ましいものを選択できるようにポスターなどで情報

提供をして欲しいと〈子育て情報〉の提供を望んでいた。

ジュースに入っている砂糖の量を示してあるのはよくあるんですけど、こんなご飯にしてみたらっていうメニューとかあったらいいのかなって、(たとえば)朝ご飯の量とか。じいちゃん、ばあちゃんにお菓子あげるなって言っても、ゼロには出来ないで、これよりは、小魚や昆布があったりとか…ちょっと高くても、ヘルシーだよっていうのがあったら、分かりやすい。

《子育ての振り返り》は〈夫を巻き込む〉〈夫の子育て法〉〈夫に学ぶ〉の概念で構成されていた。〈夫を巻き込む〉は、夫は積極的に家事・育児に参加していたわけではなく、母親が対応できない状況になってはじめて参加するようになっていた。そして、夫を上手に巻き込むことによって、母親は負担軽減を図っていた。

(夫は)、最初は全然しなかったですよ。でも2人目ができて、洗濯とかやるようになって。でも私が産休・育休で休んでいる時は、1年間私が休んでいるときはやらなくなって。復帰してからはけっこう大変だった。今までと同じ仕事なのだけできないことがあって。私の大変さもわかって、けんかもして、怒ったり、ほめたりもして。最近やっと、最近って言っても6・7年たってやっと…。

〈夫の子育て法〉は、母親とは異なる面があり子どもも父親には一目置いていると定義された。

自分には分からないことが、(父親と男の子は)男同士で通じ合っていることがあるんですよ。こういうやり方もあるんだって、男親にしかできない、動いたりとか、どこまでも歩いていくので、子どもが、付き合ったり。

父親は母親とは異なる方法で子どもと接しており、また子どもはそれらを自然に受け入れており、その様子から子育て法を〈夫に学ぶ〉体験をしていた。

長男はとってもマイペースなんで、何で毎朝同じ事を言わすのって…。今日は黙って「早くしなさいよ」は1回にしようって決めるんですけど、(しかし、子どもは)絶対遅刻するペースで動く…。お父さんが1年生と4歳の男の子は6時に起こすのを2週間ほど前から始めた。お風呂が2人とも好きなんで、朝お風呂につかってから学校行けるよっていうのに喜んで…。(父親と子ども2人の)3人で本読みながら風呂が沸くのを待って…。

(3)【子育て環境作り】

【子育て環境作り】は〈子どもへの関心〉と〈母親同士の繋がり〉の概念で構成されていた。〈子どもへの関心〉は、親は子どもが何をしたいのかに関心を持ち関われば、育児はそれほど苦痛ではないと定義され、育児を肯定的に受け止めるものであった。

子どもに関心がある人は、学校行事とか地域行事にも参加する。子どもに関心がないと、思う気持ちがあまりなく参加できないって感じ…。

〈母親同士の繋がり〉は、子どもを持つ母親同士が子育てに関する情報交換を行い、子どものためになるように繋がる行動と定義された。

集まってこんなだったよとか、こんなの作ったよとか、簡単な手作りでもいいのがあったらみんなに紹介(する)みたいな感じの機会を作ったら…、子どものおもちゃとかこれが手元に残る(もの)だったら、参加するお母さん達が増えると思う。(中略)子どものおもちゃとかこれから必要になってくる学校で使うカバンとか、なんかそういうの作るとか、交流が

できたらいいなって思ってた。

《支援の求め》や《子育ての振り返り》の段階から積極的に【子育て環境作り】の必要性を認識しそれに取組みたいと意識が変化していた。また、最初の頃は、同じA島に住んでいてもお互いをあまり知らなかったが、交流会を通して同じ子育てをする者として絆を強めたいと思うようになっていた。

4. 考察

1) 困難感

少子化の進行により子どもの世話をする経験がないまま親になり、子どもの世話は自分の子どもが始めてという状況から、子どもの健康状態が優れないときの対処方法が分からず医療機関に〈ヘルプ〉を求め、問題解決を図っていた。

武田(2002)によると、カナダのトロントでは「ヘルシーベビー・ヘルシーチルドレン」プログラムによって誕生から6歳までの子どもに対し総合的なケアがなされている。そのプログラムによって必要度が最も高い出産後や退院時期に子育て支援機関の情報が提供される。また、病院と保健所の連携も密にとれており、病院からの退院連絡により保健所は母親へ電話カウンセリングや情報の提供を行い、必要な者には家庭訪問やペアレンティングプログラムや赤ちゃんの世話の仕方に関するプログラムの紹介を行っている。カナダでは祖父母からの育児サポートがないため、夫婦で育児ができるような様々なプログラムの開発実施がなされている。我が国でも育児経験のない親が子育てに困らないように様々なプログラムの開発と実施が望まれる。

母親に精神的余裕がない場合、子どもの行動に対して余裕をもって待つことができずイライラし〈子どもにあたる〉という行動をとっていた。多世代が同居していた時代には、義父母や

兄弟姉妹の応援や手本もありうまく対応できたと思われるが、核家族ではそれらが得られないこと、また日中は子育てを一人で行ない家庭という密室の中で自分の感情を制する者がいず子どもに感情をそのまま表出していると思われる。換言すると、核家族では日中は母子のみの孤独な環境にあり、意のままにならない育児にストレスを感じ、自己コントロールができずに〈子どもにあたる〉経験をしていたと推察される。そのような状況に陥った母親には、外に誘い出し、他者と交流させることによってストレスが緩和されることもあるとの報告もあり(汐見, 2000)、今後近隣者や母子保健推進員などの働きが期待される。

2) 工夫して乗り切る

サブカテゴリー《工夫し乗り切る》は〈早起きさせるための工夫〉や〈義父母との考え方の違い〉によって構成されていた。その中の〈早起きさせるための工夫〉には、子どもを無理に起こすのではなく、起きる楽しみを持たせることによって自発的に起きるような仕掛けがあった。子どもは親から褒められたり認められたりすることによって自尊感情や自己効力感が育つ(安梅, 2010) ため、そのような対応ができる親は子どもの育ちをよく理解していると解釈される。

《義父母との考え方の違い》は、子育てについての考え方が母親自身と義父母とで異なっているため、義父母に育児の意識や方法を変えて欲しいと思っているが言い出せずに自分が義父母に合わせる、つまり自分を抑圧することによる消極的工夫を示していた。家制度の名残である嫁姑問題を無意識にひきづり、うまく関係が結ばず嫁が姑に遠慮していると思われた。3世代同居の場合は父方の祖父母との同居が多い(国立社会保障・人口問題研究所, 2014) ことから、〈義父母との考え方の違い〉による消極的工夫が

続けば母親はさらに強いストレス状態に陥る可能性も否定できない。出産や育児の相談相手として心理的に頼りにしているのは母方の祖父母である(内閣府, 2005; 国立社会保障・人口問題研究所, 2008)。また、都心部の調査ではあるが母方の親族のサポートが育児満足度を高めるのに対し父方の親族サポートは母親の生活満足度を低下させる(松田a, 2001) との報告がある。その報告が離島の人々にも適用できるか疑問もあろうが、同時代に生きているのである程度は当てはまるであろう。よって、今回の育児交流会に参加していた母親たちは夫方の親との関係性が大きな問題にならないよう消極的対応をしていたと解釈される。

義父母の子ども時代と推定される昭和30年代から40年代は高度経済成長期にあたり(環境白書, 2003)、父親は外で仕事、母親は家事・育児の担当という性役割が明確であり(落合, 2004)、当時は食事や間食などは家庭で準備し子どもに与えていたが、現在ではスーパーなどに総菜や菓子類が多い。今回、祖父母が子どもに適さないものを与え健康に害があった語りの中では、義父母のこのような子育て行動に対し専門家の言葉を利用しながら改善に向けた対応策を取っていた。

義父母は子育ての強力な支援者であるものの、それが逆効果になることもあり、義父母への子育てに関する教育が望まれる。石井等は祖父母を対象として、子どもにとってよい食材やメニュー、おやつのあげ方に関する内容の孫育児支援プログラムを実施した結果、祖父母は両親と共通認識を持つ必要性を認識し、また、嫁にも言いたいことがあることに気づき、押しつけにならないようなサポートを行うことを自覚するようになっていたと報告している(石井, 井出, 佐藤, 2008)。祖母の育児経験は孫育てにおいて有用な部分もあるが、食物アレルギーなど新しい知識も必要であり、多くの場所で孫育

て講座が必要であると思われる。

また、A島では祖父母が夕食前に果物や菓子を与え、その結果、子どもが食事を取れないことが語られていた。先行研究でも祖父母が夕食前に食べ物を与え、子どもが夕食をとれない状況があり（西館，徳田，2011）、また、祖父母と同居している幼児はう蝕率が高い（三藤，2006）との報告もある。これらから、三世同居は子どもの食生活にマイナス面もあり、子どものことを考えて食事や間食の与え方を家族員全員で共有する必要があるだろう。

3) 早寝させることの困難

睡眠は人間にとって重要である。特に子どもにとって睡眠は成長にも影響する（神山，2004；神山，2008）ことから子どもの睡眠について考慮し環境を整えるよう、文部科学省も国民運動として「早寝・早起き・朝ご飯」を勧めている（文部科学省）。本研究では、《早寝させるのが困難》は、〈子どもの特徴〉と〈親の生活リズムの影響〉で生成されていた。〈子どもの特徴〉は、眠る環境を整えても眠らない子であった。就学前の子どもは夜間の睡眠時間が10時間必要である（佐野，1986）ことから、子どもの1日の過ごし方を見直し、眠らない原因を見つけ、適切な対処が必要と思われる。佐野は保育園での昼寝の時間帯を午後2時まで、遅くとも2時半には起きるように設定する必要がある、つまり、長時間の昼寝は望ましくないとしている。それと平行して、昼間の戸外での体を使った活動性のある遊びが早寝を促すとしている。さらに早寝のしつけや家族の夜型行動の修正なども必要になるだろう。

〈親の生活リズムの影響〉は母親が有職の場合、仕事終了後に家事・育児を行なうことから、必然的に子どもの夕食や入浴時間並びに就床時間が遅くなり、先行研究（矢野，大浜，産田，2007）と同様な結果であった。また、父親の帰

宅時間が子どもの就床時間と重なると子どもが就床しない状況であった。男性にとって仕事は人生そのものであり仕事上の役割を自由に選択できるものではないが、乳幼児期の睡眠不足は、子どもの心身の健康（橋本，2004；小橋川，小林，高倉，宮城，石川，2002；矢野ら，2007）、並びに脳の高次機能への影響が示唆される（鈴木，2006）ことから子どもには十分な睡眠が必要である。そのためには親の帰宅時間を早めるなどの調整が必要であろう。すぐに社会を変革するのは無理かもしれない（武石，2010）が、適切なワーク・ライフ・バランスが仕事の能率をあげ（武石，2011）、さらに家庭生活も充実する（パク・ジョアン・スクッチャ，2002）との報告もあり、今後就業時間に関する職場の調整が課題としてあげられよう。

4) 支援の求め

子育ての負担や悩みの第1位は「自分の自由な時間がもてない」で（国民生活白書，2005）、多くの母親が自由時間がないことをストレスと感じている。本研究の結果でも、育児に専念することにより自分の時間が持てずにストレスと感じていた。短時間でも子どもの世話から解放され、自分の時間を持つことはストレス解消となる（田村ら，2002）ことが明らかになっていることから、母親のリフレッシュの時間を子育てをしていないと否定的に評価せず、積極的に母親が自由に使える時間が確保できるような支援が必要である。

〈子育て情報〉のニードは子どもにとってよいものが選択できるような情報の提供を求めるものであった。家庭の教育力の低下や親の未熟さが指摘され（大日向，2003；大日向，2007）、子育て法が分からない者が増えている。母親になったらすぐに子育てができるとは思わずに、カナダのトロントの取り組みのように（武田，2002）、育児情報を積極的に提供する取り組み

や具体的な子育てに関する教育が必要であることが示唆された。

5) 子育ての振り返り

《子育ての振り返り》は〈夫を巻き込む〉と〈夫に学ぶ〉で生成されていた。女性の社会進出により、既婚女性は仕事と家事・育児の二重負担との指摘もある(松田b, 2001)が、本研究では母親たちは、上手に〈夫を巻き込む〉ことによって家事・育児の軽減を図っていた。

日本では主に母親が育児を行っており(国立社会保障・人口問題研究所, 2014)、父親の子育て実施状況は先進諸国と比較して少ない(厚生労働省, 2006;千葉, 1996)。しかし、育児の相談相手は夫が最も多い(内閣府, 2005)ことから、我が国では夫は母親の精神的支援を担って

いると推測される。本研究でも夫は家事・育児に参加を求められると対応していることから、必要時に参加していると思われる。今後はさらに夫を家事・育児に巻き込むことにより、母親の仕事と家事・育児の二重負担の解消に繋がると推察される。

〈夫に学ぶ〉は、夫が本人(母親)とは異なる方法で子どもに接しており、また子どもも素直に父親の育児を受け入れているのを見ることによって育児法を学んでいた。夫の育児法を見ることによって自分の行っている育児を振り返る機会になり、新しい見地が広がると思われる。

6) 子育て環境作り

《子育て環境作り》に関して、はじめの頃は母親同士の交流が少なかったが、交流会の回数を

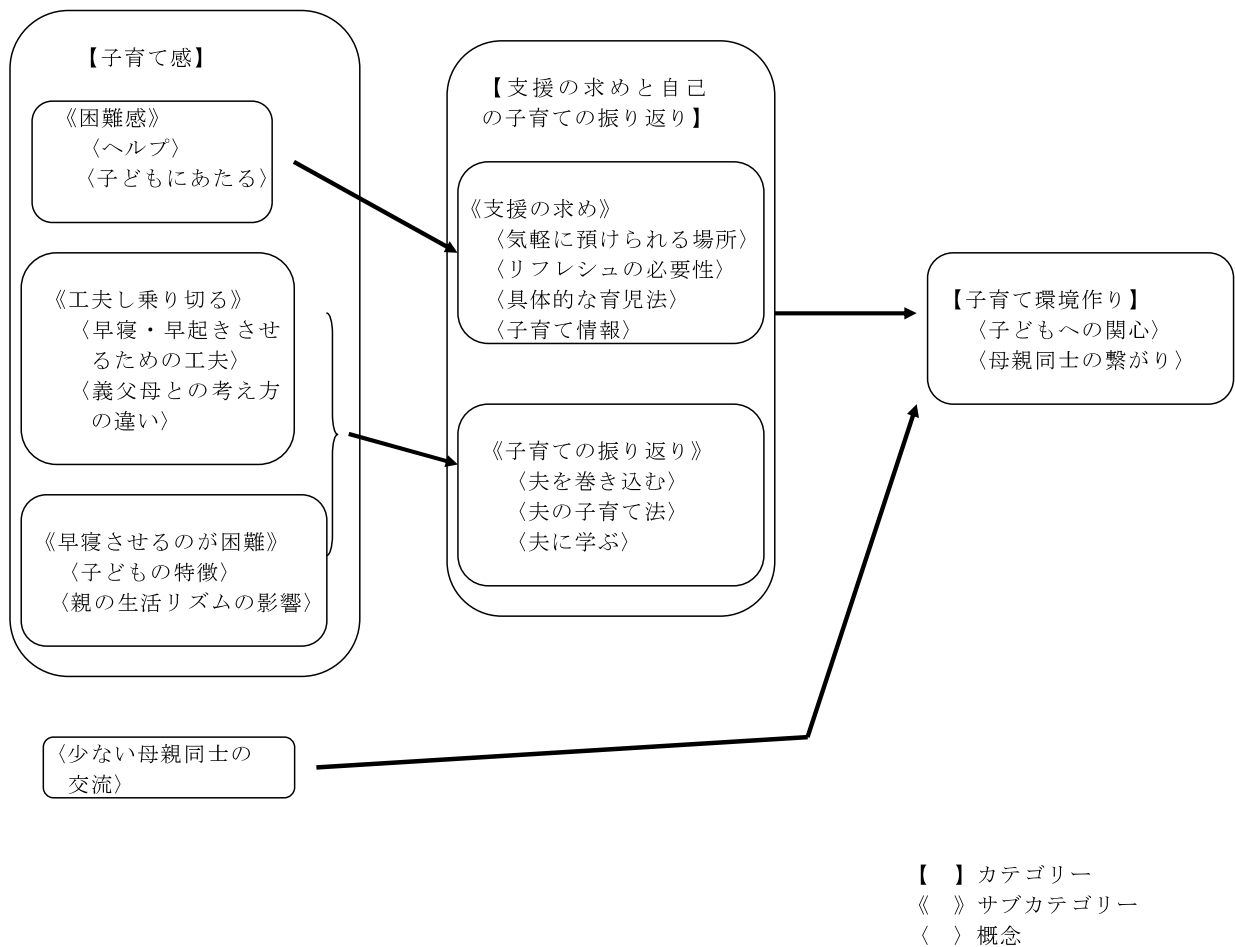


図1 幼児を持つ母親の母親行動の発達プロセス

重ねることによって子育てに関する情報交換や子どものために〈母親同士の繋がり〉の必要性を認識するようになっていた。母親のネットワークの広さが育児不安、育児ストレスの解放要因として注目され、各自治体では育児教室や地域の子育てサークルなどの仲間作りの場を提供するようになってきている。子育てサークル活動には行政が管理するものと母親たちが自主的に管理するものがあるが、兵庫県の調査では母親たちが主体的に行った方がよいとの結果もある(21世紀ヒューマンケア研究機構, 2003)。A島では母親たちが主体的に繋がりたいという意識を持つよう変化しており、今後は自主的に育児サークルを立ち上げ活動することにより育児ストレスを軽減する方法を探すものと期待される。しかし一方、公園デビューという言葉のように母親同士の関係作りの難しさも指摘されている(中西, 岩堂, 2004)。これは高度経済成長期以降に生まれた者の特徴と思われる。すなわち高度経済成長期には道路が分断され、異なる年齢で構成される遊び集団が消失した。その時期以降に子ども時代を過ごした者は日常生活で異質なものを許容する訓練がなされず、同質集団で育ってきた。そして同質的集団内で排他的傾向が強いと少しの違いを気にし、人間関係を作るのが苦手である(汐見, 2000)。したがって、A島の母親同士の関係がうまくネットワークの構築ができ、またストレスにならないように先輩母親が静かに見守るといった側面支援も必要と考えられる。

本研究はA島の乳幼児を養育中の母親を対象としたものであり、一般化するには限界がある。今後はさらにデータ数を増やし、母親行動の成長プロセスを明確にする必要がある。

5. 結論

A島の幼児の母親は、子育てに対して困難感があったが自分なりに乗り切る工夫をしていた。

対処できない困難な場面では周囲の支援を求めて、最終的には子どもへの関心を示すこと、また母親同士の繋がりを作ることによって子育て環境を作り上げようと母親行動の意識が変化していた。

謝辞

A島の子育て交流会に参加した保護者のみなさま、会の運営に関わった関係者の方々に深く感謝いたします。

本研究は平成23年度～平成25年度JSPS科研費23593324(代表者 上田礼子)の助成を受けたものの一部である。

引用文献

- 安梅勅江. (2010). 子育て環境からみた子どもの育ち. 学術の動向, 4, 28-33.
<https://www.jstage.jst.go.jp/article/tits/15/4/15-4-28/-pdf>
- 荒川茂則. (1991). 戦後日本の家族と私化. 奈良大学紀要. 第19号, 177-198.
- 千葉聡子. (1996). 国際比較調査からみた日本の父親の子育ての現状と問題点. 『教育学部紀要』立教大学教育学部, 第30集, 139-150.
- 橋本俊顕. (2004). 子供の睡眠の現状. 四国医誌, 60(1, 2), 14-19.
- 石井邦子, 井出成美, 佐藤紀子. (2008). 家族員の育児対処能力向上のための孫育児支援プログラムの有用性と課題. 千葉看護会誌, 14(1), 107-114.
- 環境白書. (2003).
<http://www.env.go.jp/policy/honbun.php3?kid=218&bfl=18&serial=13428>
- 経済企画庁. (1994). 平成5年国民生活白書. 豊かな交流 人と人のふれあいの再発見.
<http://www5.cao.go.jp/seikatsu/whitepaper/h5/wp-pl93-01201.html>

- 木下康仁. (2003). グランデッド・セオリー・アプローチの実践－質的研究への誘い. 弘文堂.
- 小橋川久光, 小林稔, 高倉実, 宮城政也, 砂川武彦. (2002). 沖縄県小学生用メンタルヘルス尺度の検討. 琉球大学教育学部紀要, 第61号, 17-24.
- 国立社会保障・人口問題研究所. (2008). 第4回全国家庭動向調査 結果の概要.
www.ipss.go.jp/ps-katei/j/nsfj4/NSFJ4_gaiyo.pdf.
- 国立社会保障・人口問題研究所人口構造研究部. (2014). 2013年社会保障・人口問題基本調査第5回全国家庭動向調査 結果の概要.
<http://ipss.go.jp>
- 厚生労働省. (2006). 平成18年度版厚生労働白書.
- 神山潤. (2004). 眠りを奪われた子どもたち, 岩波ブックレット.
- 神山潤. (2008). 睡眠の生理と臨床 健康を育む「眠りの科学」改訂第2版. 診断と治療社.
- 文部科学省:
http://www.mext.go.jp/a_menu/shougai/a-sagohan/
- 松田茂樹a. (2001). 育児ネットワークの構造とサポート力. 家族研究年報, 27, 37-48.
- 松田茂樹b. (2001). 性役割分業と新・性約割り分業－仕事と家事の二重負担－. 哲学第106集.
- 三藤聡. (2006). 尾道市における乳幼児のう蝕病率に影響を与える生活・環境要因について. 口腔衛生学会雑誌, 56(5), 688-709.
- 森岡清美. (1992). 日本家族の現代的変動. 家族社会学研究, No. 4, 1-10.
- 内閣府. (2005). 「暮らしと生活」シリーズ平成17年版高齢社会白書. p56.
- 内閣府. (2005). 平成17年度版国民生活白書子育て世代の意識と生活.
- 中西美紀, 岩堂美智子. (2004). 幼児を持つ母親の仲間関係と育児困難感－内的ワーキングモデル尺度を用いて－. 生活科学研究誌, Vol. 3《人間福祉分野》.
- 西館有沙, 徳田克己. (2011). 子どもへの菓子の与え方に関する研究－母親の子どもへの菓子の与え方とそれが成長後の子どもの菓子接種に及ぼす影響について－. 富山大学人間学部発達科学部紀要, 5(2), 41-49.
- 21世紀ヒューマンケア研究機構家庭問題研究所. (2003). 地域における子育て支援の報告書.
- 野口順子, 小川佳世, 松村恵子. (2005). 幼児を育て育てている母親の悩みと育児ストレス－保育所児と幼稚園児との比較－. 香川県立保健医療大学紀要, 2, 79-96.
- 野々山久也. (1994). 家族ライフスタイルの多様化への潮流. 都市住宅学, vol 6, 5-9.
- 落合恵美子. (2004). 21世紀家族へ 第3版. 有斐閣.
- 大日向雅美. (2003). 求められている子育て支援とは－昨今の育児不安虐待問題から考える－. 京都母性衛生学会誌, 11, 2-5.
- 大日向雅美. (2007). 家族と地域の子育て力を応援する生協の役割, 生活協同組合研究, 10, 5-10.
- パク・ジョアン・スクッチャ. (2002). 会社人間が会社をつぶす－ワーク・ライフ・バランスの提案. 朝日新聞社.
- 佐野勝徳. (1986). 子育て子育て生活リズム乳幼児編. エヘデル研究所.
- 佐藤紀子. (2000). 子育てする女性の心と体を支えるために. 子ども未来, (341), 7-9.
- 汐見稔幸. (2000). 親子ストレス 少子社会の「育ちと育て」を考える. 平凡社.
- 島田伸一. (2005). 虐待の発生予防へのチャレンジ市町村. 母子保健情報, 50, 102-105.
- 鈴木みゆき. (2006). 保育と睡眠. 上里一郎(監

- 修), 白川修一郎 (編), 睡眠とメンタルヘルス (pp209-233). ゆまに書房.
- 高橋有里. (2007). 幼児の母親の育児ストレス状況とその関連因子. 岩手県立大学看護学部紀要, 9, 31-41.
- 武石恵美子. (2010). ワーク・ライフ・バランス実現への課題国際比較調査からの示唆. RIETI Policy Discussion Paper Series10-P-004. 独立行政法人経済産業研究所
<http://www.rieti.go.jp/jp/>
- 武石恵美子. (2011). ワーク・ライフ・バランスを実現する働き方改革と職場マネジメントの課題, 19-32. Hosei University Report.
- 武田信子. (2002). 社会で子どもを育てるー子育て支援都市トロントの発想. 平凡社.
- 田村毅, 倉持清美, 中澤智恵, 岸田泰子, 木村恭子, 及川裕子, 荒牧美佐子, 持田恭子, 森田千恵. (2002). 出産・子育て体験が親の成長と夫婦関係に与える影響 (1)ー出産前後の面接調査のまとめー. 東京学芸大学紀要. 第6 部門Vol54, 41-56.
- 横山文野. (2002). 戦後日本の女性政策. 勁草書房.
- 上田礼子. (2011). 現代子育て環境アセスメント PACAP (Pre-Assessment of Child Abuse prevention) 手引書, 竹井機器工業.
- 矢野香代, 大浜敬子, 産田真代. (2007). 母と子における睡眠行動の関連性と課題. 川崎医療福祉学会誌, 17(1), 175-183.

Development process of maternal behavior – From the narrative of child-rearing mothers in a island –

Kiyoko Tamashiro, Tomoko Nishihira, Chieko Yoshikawa, Yuka Kayoda, Reiko Ueda

Abstract

Background : In current society, child-rearing is challenging practice as there are an increasing number of nuclear families in which imitative learning of child-rearing knowledge and skills is difficult.

Objective : By observing mothers' participation in the exchange meeting, we aim to explicate transition in mothers' behavior and discover elements what can be useful for child rearing support.

Method : We analyzed data from Pre-Assessment of Child Abuse Prevention (PACAP) research targeted on 550 mothers who rear infants on A Island. We abstracted 3 relevant groups for this analysis - those who seek for consultation, who illustrate abuse risks, and who show normal responses - and examined development stages among mothers who belonged to one of these groups and who participated in "Child-Rearing Exchange Meeting." The meetings were held 3 times weekly, and 10 mothers were enrolled. We analyzed their statement with reference to Modified Grounded Theory Approach (M-GTA).

Result : At the stage of "feeling child rearing," mothers felt "difficulty" and tried to find ways to "overcome it with own ideas." It was the stage that they felt "it was difficult to let their children sleep earlier" in accordance with national health promotion. At the stage of "seeking for support," they looked for baby sitting service as well as "refreshment" time too maintain sound mental state. Moreover, mothers seek for "concrete child rearing methods" and "child rearing information" with which they can better their child rearing. By "involving husbands" in domestic work including child rearing, they tried to mitigate mental burden. Mothers "looked back" their child rearing by observing their husbands' child rearing methods. At the final stage, through their "interests in children," child rearing becomes part of their life. Then, they deepen "relationship with other motors" and become interested in "building child rearing environment."

Conclusion : In the first session, mothers reviewed their child-rearing. In the second session, they sought for support involving their husbands. In the last session they realized that it is necessary to arrange their child-rearing environment.

Keywords : mothers with infants, child rearing exchange meeting, maternal behavior, development, process